

現状把握

中学校と高校の間には どのような段差が存在するか

中学校と高校はそもそも何がどのように違うのか、調査データなどを基に、さまざまな視点からその差を検証する。

1 文部科学省の統計から見る中学校・高校の違い

**中学校の数は高校の2倍だが、
教員数はほぼ同じ**

中高接続の課題を検討する上で、まず、中学校と高校の違いを把握しておきたい。まずは文部科学省の統計資料の数字を見てみよう。

学校数を見ると(図1)、中学校は1万815校、高校は5116校であり、中学校数が高校数の約2倍である。学級数も同様に、中学校が高校の約2倍の数となっている。全体に占める私立学校の割合は、中学校が約7%であるのに対し、高校は約26%だ。一方で、

教員数は中学校と高校でほぼ同じ数だ。

次に教員の男女比を見てみると、女性教員の比率は、中学校は41.9%、高校は29.4%と大きく差があることが分かる(小学校は女性教員が62.8%)。

学歴構成では、中学校は大学院出身者が5.8%であるのに対し、高校では12.3%を占める。

また、1週間当たりの授業時数は、中学校が14.9時間、高校が13.7時間となっており、中学校の教員が平均して週当たり1時間授業時数が多いことが分かる。

図1 学校数・教員数・平均年齢・男女比など

	中学校	高校
学校数	合計 10,815 校	合計 5,116 校
	国立 75 校	国立 15 校
	公立 9,982 校	公立 3,780 校
	私立 758 校	私立 1,321 校
		*全日制課程、定時制課程
学級数	121,070 学級	64,200 学級 *全日制課程、定時制課程・本校、分校計(公立の本科)
教員数	250,899 人(本務者)	238,929 人(本務者)
女性教員比率	41.9%	29.4%
平均年齢	43.8 歳	45.1 歳
	男性 44.8 歳	男性 46.3 歳
	女性 42.3 歳	女性 42.0 歳
本務教員の学歴構成	大学院 5.8%	大学院 12.3%
	大学 88.0%	大学 85.5%
	短大 6.0%	短大 1.5%
	その他 0.3%	その他 0.7%
週当たり教科等担任授業時数	14.9 時間	13.7 時間

*文部科学省 H22 年度学校基本調査/H19 年度学校教員統計調査を基に編集部で作成

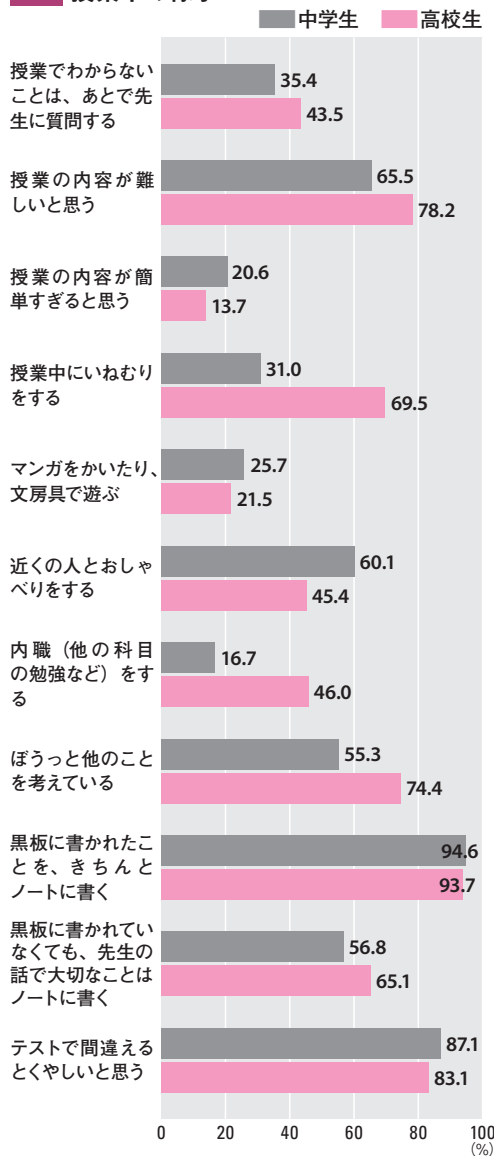
2 生徒の生活状況、学習や社会に対する意識の違い

努力に対する価値観が中学生から高校生で低下

ここでは、中学生と高校生の違いを比較した。通塾率を見ると(図2)、中学生は高校生に比べ、割合が多い。中学生は成績下位層でも約3割の通塾率がある一方、高校では、進学校でも約3割であり、進路多様校では6・4%となっている。平日の家庭学習時間は中高共に成績や偏差値で大きく差があるが、進路多様校に通う高校生の学習時間は、中学生の下位層の学習時間の平均よりも少ないことが分かる(図3)。

また、授業中の様子を比較すると、高校生は「授業中にいねむりする」「内職(他の科目の勉強など)をする」「よくある」「時々ある」を回答する割合が多く、中学生は、「近くの人とおしゃべりをする」の割合が多い(図4)。

図4 授業中の様子



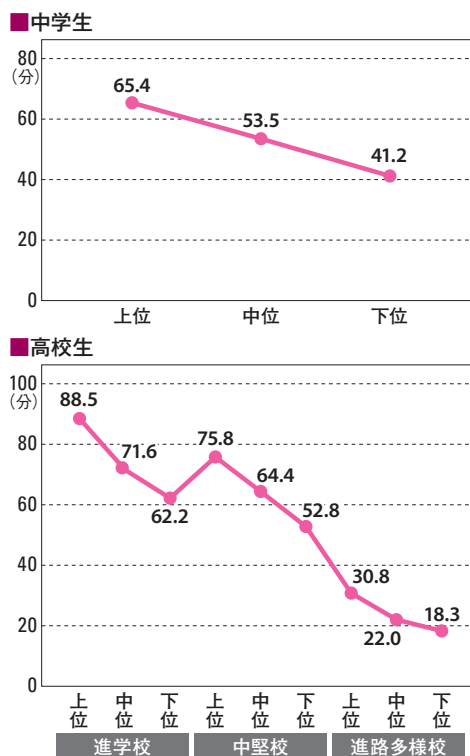
注) 「よくある」+「時々ある」の%
出典/ Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

図2 通塾率(成績・高校偏差値層別) (%)

	上位	中位	下位
中学生	55.6	47.7	33.6
高校生	28.1	14.6	6.4

出典/ Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

図3 平日の家庭学習時間(成績・高校偏差値層別)



注) 平均時間は「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を210分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した
出典/ Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

調査概要 「第2回子ども生活実態基本調査」

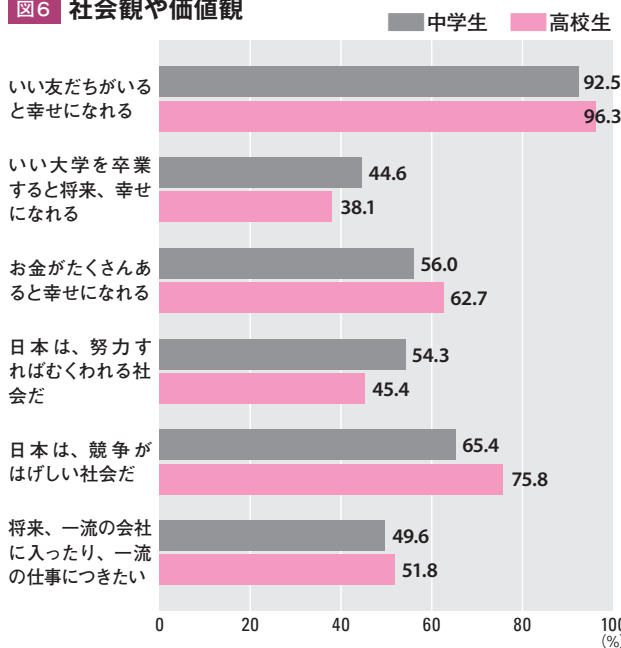
- 調査時期: 2009年8~10月
- 調査対象: 小学4年生~高校2年生。中学生は3,917人(12校)、高校生は6,319人(13校)
- 成績: 中学生・高校生は国・数・理・社・英の5教科の成績の自己評価をそれぞれ5段階で回答してもらい、それらの結果を合計してほぼ3等分になるように「上位」「中位」「下位」を設定
- 高校偏差値: 「進学校」偏差値60以上目安、「中堅校」偏差値50~59目安、「進路多様校」偏差値50未満目安

好きな授業に関する回答を見てみると(図5)、中学生が好きな授業スタイルは「パソコンを使ってする勉強」「友だちと話し合いながら進めていく授業」「グループで何かを考えたりに調べたりする授業」などであるのに対し、高校生では「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」の割合が他の項目と比較して最も多い。

また、社会観や価値観(図6)では、「いい友だちがいると幸せになれる」は差がなく、友だちの大切さは中高で共通であることが分かる。

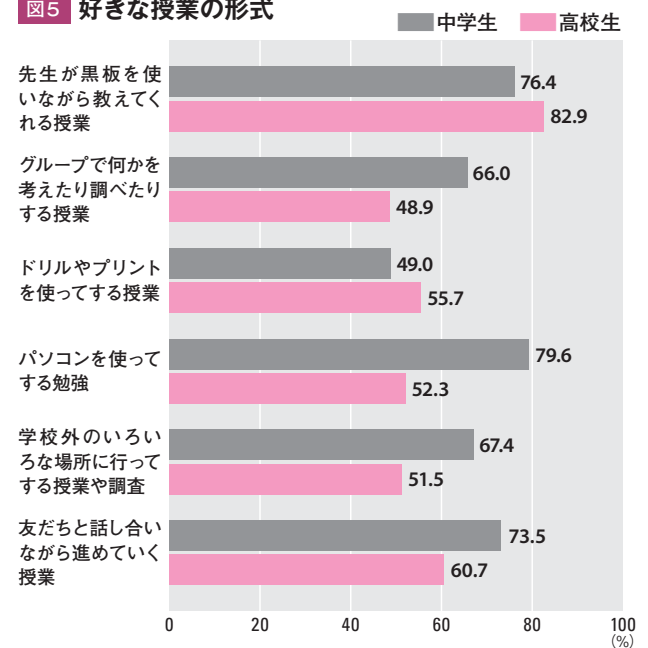
注目したいのは「日本は、競争がはげしい社会だ」という項目に「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した割合は中学生より高校生が多いことだ。一方で「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」は中学生44・6%、高校生38・1%、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」は中学生54・3%、高校生45・4%といずれも中学生の方が多い。中学生から高校生にかけて、社会の厳しさへの認識は強まるが、努力することや大学進学に対する価値が相対的に低下していることが分かる。

図6 社会観や価値観



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%
 注2) 中学生・高校生共に30%未満の項目は省略
 出典/Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

図5 好きな授業の形式



注1) 「とても好き」+「好き」の%
 注2) 中学生・高校生共に50%未満の項目は省略
 出典/Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

■調査概要 「第4回学習基本調査・国内調査 中学生版、高校生版」

- 調査時期：2006年6～7月
- 調査対象：全国3地域【大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）】の中学2年生2,371人、全国4地域【東京都内、および東北、四国、九州地方の都市部と郡部】の普通科高校2年生4,464人

中高接続に関する
高校現場の課題

- 中学校の段階までは学習に達成感を感じている生徒が多いように思うが、高校入学後は大学入試が念頭に置かれるためか、達成感が得にくいように思う。そうしているうちに「学びから逃避」してしまう生徒が多い。(宮城県)
- 「勉強も部活もそこそこでいい」という雰囲気を感じた最近の入学生に感じる。「勉強も部活もそこそこ」という高校の生活に順応できず、不適応を起す者が徐々に増えてきたように思う。(静岡県)
- 毎日の授業を中心に据えた学習習慣が身に付いていない生徒が多いため、高校入学後しばらくすると、徐々に学力の差が広がってくる。全ての生徒に「予習→授業→復習」の習慣化を徹底することが課題だ。(新潟県)
- 目標の高校に合格するために最低限必要な勉強はしてきているが、それ以上に学力を身に付けようと思つている生徒が少ない。また、高校入学時点では将来の目標についてまだ考えられていない生徒が多い。(北海道)

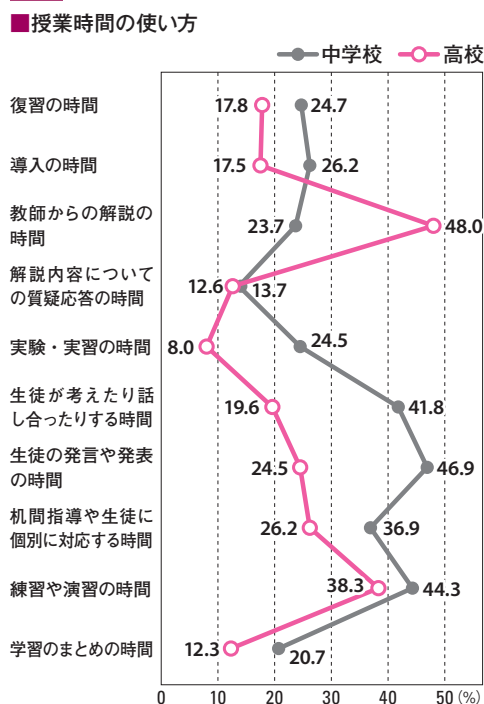
3 教師の意識や指導に関する違い

主体的に授業参加させる中学校、教師からの解説が中心の高校

好きな授業の形式が中学生と高校生で大きく異なるのと同様に、中学校と高校の教師が心掛けてしている授業スタイルも異なる(図7)。中学校では「生徒の発言や発表の時間」「生徒が考えたり話し合ったりする時間」など、生徒が主体的に学習に参加する授業を心掛けているのに対して、高校では「教師からの解説の時間」や「教師主導の講義形式の授業」が重視されている。

指導観を見ると、中高共に「自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること」が「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」よりも多く、自主性を育てることを大切にしている(図8)。教育内容については、中学校が「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱う

図7 授業時間の使い方・授業方法

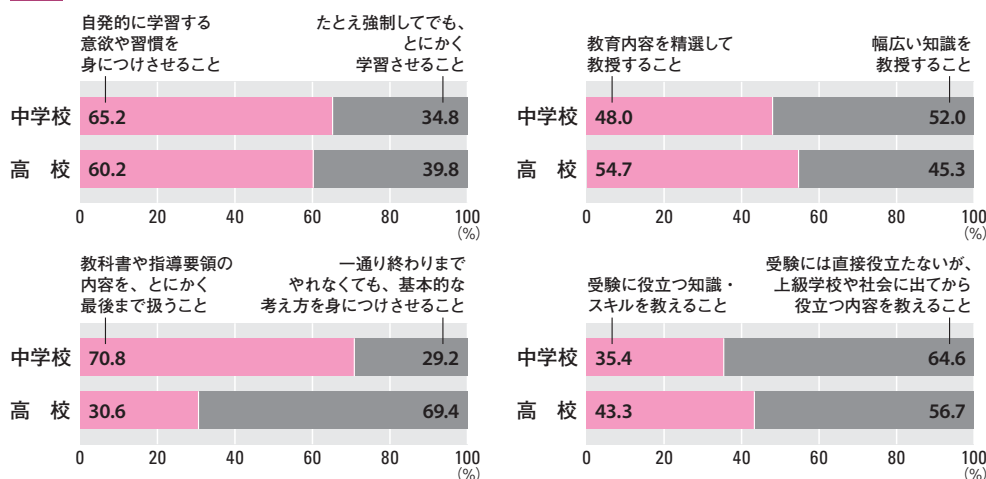


■授業方法 (%)

	中学校 (%)	高校 (%)
教師主導の講義形式の授業	9.6 <<	32.5
教科書にそった授業	29.1 <	34.6
自作プリントを使った授業	35.6	36.0
教材を工夫した授業(具体物を使うなど)	43.5 >>	26.8
自分で調べることを取り入れた授業	18.0 >	10.2
体験することを取り入れた授業	22.9 >>	7.2
表現活動を取り入れた授業	36.5 >>	11.5
個別学習を取り入れた授業	18.0 >	9.6
グループ活動を取り入れた授業	37.1 >>	8.6
自由に議論する授業	11.2 >	5.8
教科横断的な授業や合科的な授業	4.2	4.4
計算や漢字などの反復的な練習	29.0 >>	18.0
小テストの実施	33.8	31.0

注1)「多くするように特に心がけている」の% 注2) < >は5ポイント以上、<>>は10ポイント以上の差があるものを示す
出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図8 指導観



注) 無回答・不明を除いて算出
出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

こと」を重視しているのに対し、高校は「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」を重視している。

図10の学校にいる時間を見ると、中学校教師の方が毎日約1時間、勤務時間が長い。

図11の指導上の悩みを見ると、「教材準備の時間が十分にとれない」は、高校に比べ中学の方が数値が大きい。「教育行政が学校現場の状況を把握していない」については中高共通の悩みだ。「小学校／義務教育段階までの学習内容が定着していない生徒が多い」「生徒の学習意欲が低い」「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」といった生徒に関する悩みは中高の違いだけでなく、高校間でも、入学してくる生徒の状況によって大きく異なる。

平日の朝や放課後、土曜日等の取り組みを見ると(図12)「平日の朝読書」は中学校での実施率が高いが、「土曜日の学習、進路等の指導」は平日の放課後の補習、進路等の指導は高校で圧倒的に高い。

指導力向上のための取り組みも、中高で違いが出ている(図13)。「校

図11 指導上の悩み

A(生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点) B(同評定平均3.5～4.0点)
C(同評定平均3.0点) D(同評定平均1.0～2.5点) (%)

	中学校	高校(普通科のみ)			
		A	B	C	D
教材準備の時間が十分にとれない	81.3	71.5	68.3	67.9	62.1
小学校／義務教育段階までの学習内容が定着していない生徒が多い	80.9	43.0	72.2	91.7	93.8
作成しなければならない事務書類が多い	76.9	73.9	72.7	75.3	68.9
休日出勤や残業が多い	73.2	74.4	69.4	64.9	47.4
生徒の学習意欲が低い	73.2	49.2	76.6	92.9	91.3
教育行政が学校現場の状況を把握していない	72.0	79.3	78.6	80.5	78.6
生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい	71.0	45.5	57.6	74.9	77.6

注1)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%

注2) 中高それぞれ全体の平均が60%以上のものを抜粋

出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図12 平日の朝・放課後、土曜日等の時間の活用状況

A(生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点) B(同評定平均3.5～4.0点)
C(同評定平均3.0点) D(同評定平均1.0～2.5点) (%)

	中学校	高校(普通科のみ)			
		A	B	C	D
平日の朝読書	89.3	23.3	37.9	45.7	44.5
土曜日の学習、進路等の指導	4.5	85.0	71.1	47.8	25.3
平日の放課後の補習、進路等の指導	27.9	91.7	94.5	94.2	79.5
長期休業中の学習、進路等の指導	72.8	93.3	92.5	95.7	90.4

注1)「実施している」の%

注2) 進路等の指導は高校のみの項目

出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図9 宿題の頻度・内容

A(生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点) B(同評定平均3.5～4.0点)
C(同評定平均3.0点) D(同評定平均1.0～2.5点) (%)

	中学校	高校(普通科のみ)			
		A	B	C	D
授業のたびに出す	25.6	25.6	22.5	14.4	9.4
授業2、3回に1回くらい出す	30.6	21.1	26.4	27.8	17.9
授業4、5回に1回くらい出す	18.1	11.0	15.8	13.6	12.3
月に1回くらい出す	9.7	8.9	12.3	11.4	11.7
宿題はほとんど出さない	14.7	31.3	21.4	32.1	48.7
無回答・不明	1.3	2.0	1.5	0.6	0.0

出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図10 学校にいる時間

	中学校	高校
1日の平均時間	12時間3分	11時間16分

出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

中高接続に関する
高校現場の課題

◎例えば、中学と高校の英語の教科書には大きなギャップがあると思う。それを埋めるブリッジ教材をどのように開発するか、そして中学の復習をどのように行うかといった課題がある。(香川県)

◎入試だけでなくその先を見通した教科指導を行うために、いつものような内容を、どういう教科でどう展開するかについて、中高共に十分に分析、共有する必要があると感じている。(佐賀県)

◎社会と自分を知ることが目的とした進路学習は、どの中学校でも取り組んでいると思う。ただし、高校ではそれぞれの中学校でどのような取り組みを行っているか把握できていない。そのため、高校でのスタート地点を定めにくく、組織的な進路学習に踏み切れないことが課題である。(福井県)

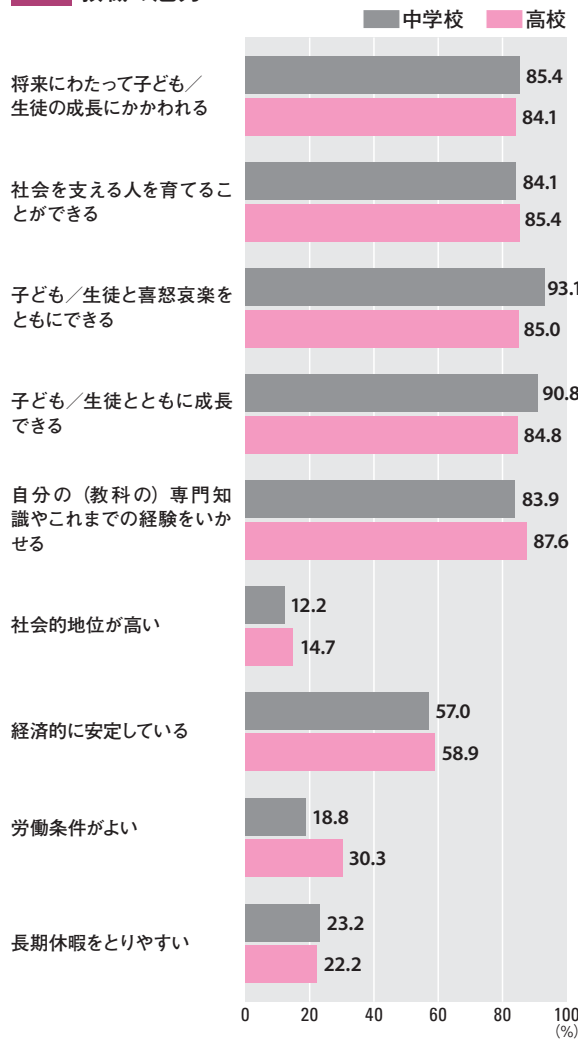
◎高校での指導のスタートラインを一定にすることが難しい。例えば出身中学校によって、国語の古典分野の扱い方が異なることがある。一定の予備知識を持っている生徒の興味を持続させつつ、「浮きこぼし」を作らないように導入期の指導をするのはなかなか大変である。(滋賀県)

内で教材・授業研究をする」は中高共に約8割と高いが「先輩・同僚からアドバイスをもらう」「管理職からアドバイスをもらう」「他校の教員と話し合う」は中高の差が10ポイント以上開いている。

校内での研修の回数(図14)は、中学校が年平均10・4回なのに対し、高校は約5回と半分程度だ。その内容は、中学校は「教科指導」が多いのに対し、高校はA・Bグループは「進路指導」、Cグループは「生徒指導」、Dグループは「教科指導」と、多く学校の状況によって研修内容はさまざまであることが分かる。

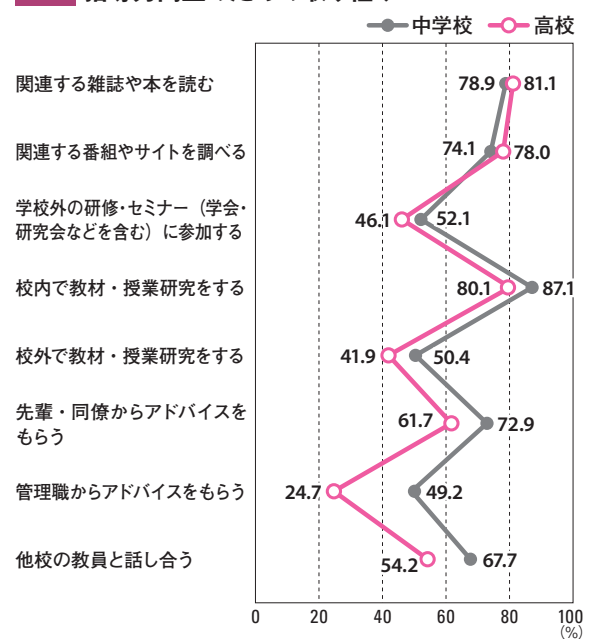
最後に、教職の魅力について確認すると、高校は「自分の(教科の)専門知識やこれまでの経験をいかせる」が一番多く、中学校は「子ども／生徒と喜怒哀楽をともにできる」が一番多い(図15)。それぞれ、一番多い項目には違いが見られるものの、生徒の成長を見られること、社会を担う人材育成に貢献出来ることなどは共通した魅力となっていることが分かる。

図15 教職の魅力



注)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%
出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)より抜粋

図13 指導力向上のための取り組み



注1)「よくする」+「ときどきする」の%
注2) 中高に共通する項目のみを掲載
出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図14 校内研修

A(生徒の中学校時の評定平均4.5~5.0点) B(同評定平均3.5~4.0点)
C(同評定平均3.0点) D(同評定平均1.0~2.5点)

領域	中学校	高校(普通科のみ)			
		A	B	C	D
今年度の校内研修の平均回数(回)	10.4	5.1	5.2	4.6	5.2
教科指導	78.9	55.0	47.2	47.1	55.4
生徒指導	49.2	43.3	36.5	55.1	50.6
進路指導	11.2	71.7	58.7	42.0	31.3

出典/Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)より抜粋

■調査概要 「第5回学習指導基本調査」

- 調査時期: 2010年8~9月
- 調査対象: 全国の公立小・中・高校の校長および教員。中学校...校長573人、教員2,827人。高校...校長830人、教員4,791人(うち校長調査と勤務校がマッチング可能な3,070人を中心に分析)
- *国語・社会(高校は地理歴史・公民)・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を対象に実施